

# 大陸（北支）

## 北支撤退の後衛尖兵

### 我が青春の記

新潟県 皆川 勝英武

昭和十九年十月ごろ、私の所属する独立混成第一旅団独立歩兵第七十六大隊は北支那河北省の威県にあり、第三中隊は廣宗県にあり、それぞれ警備討伐に従事していた。そのころ、第二十一次補充兵が入隊し初年兵教育中であり、軽機関銃班の助教の任にあつたが突如命令が下る。「米軍山東省へ上陸する、その作戦に備え独立混成第一旅団第七十六大隊は第四中隊を残し、第四十三軍幹兵団細川中将麾下の浅見少将の指揮下に

入るべく直ちに出勤せよ」とのことである。戦闘を交えての大移動である。

小隊分隊の編成が大きく変わった。私は第一小隊の第一分隊長を命ぜられた。ヤレヤレ堅苦しい教育はもう沢山だ、教育を逃れることができた、思う存分戦闘をやるぞと、内心ほくそ笑んでいた。隊員は三、四年兵の猛者揃いであり、戦闘を交えながら移動の末、何事もなく山東省に着いた。

艦砲射撃・敵前上陸の米軍を迎え撃つ陣地の構築をする前に、北の地方の八路军を徹底的に抑えておく必要があると、大隊本部において討伐が計画されていた。そんなとき、溝間准尉より呼び出された。「皆川分隊長、移動行軍間の任務は終わった。おまえ、また教育隊に戻ってくれ」「嫌です。このまま第一線へ出して

ください。もう教育は沢山です。教育ばかりやっておると本分の戦闘威力がにぶります」。准尉は眼光鋭くして「お前はこれから長い間、第三中隊の幹部として嫌というほど戦闘をやらねばならないのだ。そのためにはまず教育だ。立派な兵隊を作っておくことだ」最後に「これは命令だ」渋々教育隊へ戻り、教育に専念することになった。

部隊は教育隊を残して編成替えをやり、八路軍の巢窟である安東衛の敵陣へ進軍して行ったのであるが、数日後、部隊は数多くの戦死者を出して引き揚げてきた。

第一中隊、第三中隊が第一線であり、山岳戦のため特に犠牲が多く、准尉以下多数、下士官と兵など中隊の中核を失った第一中隊長の遺体にすがり号泣をしていた。誠に痛ましい姿であった。これが運命というものであろうか。私と交代して元気で出陣して行った第一小隊の分隊長も腹部貫通銃創で戦死。山東省安東衛の露と消えた。これが我ら青春時代における紙一重の運命であった。

教育隊は教育どころではない。皆川班長自ら屍衛兵司令となり、こんなに大勢の戦友の塚穴を掘ろうとは。懇ろに亡き戦友を茶毘に付し、部隊長の広瀬観学大尉も、分隊長の毛利天正もお坊さんであり、常に袈裟を携行していた。二人の読経の流れる中に、しめやかに懇ろに弔いを終わり、骨を拾い合ったのである。

その後、作戦の本分に戻り、第三中隊は保安山の山の中の陣地構築を、八路軍の敵襲を受けながらの悪戦苦闘の連続が始まったのである。我ら北支軍は八路軍に散々悩まされながら、本国の情報など知るよしもなく負けるなどはゆめゆめ思わず、常に士気は高揚していた。

八月九日ころより、ソ連軍満州侵襲、関東軍全滅、日本軍無条件降伏と至る所にピラが撒かれた。でかどかど壁新聞に書かれた。また八路軍の謀略宣伝かぐらに考えていたところが、部落には人影が全くいなくなった。そんなとき、本部から小口小隊長と掛川見習士官が命令を持って連絡に来了。日本が降伏したらしい。詳細はよくわからないが、第三中隊は直ちに山を

下り、本部に集結せよとの命令であった。

中隊の動揺は大きかった。全中隊広場に整列。そこではじめて停戦の情報を知った。ここで中隊長は抜刀し保安山の山頂より遙か皇居を拝し、軍人勅諭の五箇条を奉唱、これからが中隊の団結力の信が問われるところであり、終戦直後なので特に重ねて団結力を強調。八路军の謀略宣伝と兵隊の流言飛語により八路军の術中に入らぬように訓示、士気の高揚を図った。弾薬食料はできるだけ多く持って大隊本部へ急行。その間、八路军工作員の投降勧告を受け、襲撃されながら集結するや直ちに部隊長命令が下る。「第七十六大隊は本日午後、この地を撤退する。第三中隊は後衛尖兵を命ずる」そして切に切に頼むとのことであったという。直ちに下士官以上集合し命令が下達された。後衛尖兵とは字句のとおりであるが、戦いに負けて逃げるとき、最後尾にあって敵と交戦しながら自らは犠牲となり、本隊は無事逃す任務の兵隊である。戦闘時において一番危険で、だれも好まない最もいやな任務である。初めて戦いに負け、終戦という大きな痛手を受け、士

気沈滞の中であり、一度も経験したことがない後衛尖兵とは、ここまで生き延びてきたけれど、もう生きて帰ることはできないトロー鎮の露と消えるのかと思っただ。だが、分隊長自ら弱音を吐いては分隊の士気に大きく影響もし沈滞する、助かるものでも全滅しかねない。分隊長の指揮能力が問われ、十三名の分隊の生死の命運をかけることになる。しっかりと禰を締め直した。そして、第三中隊後衛尖兵の最後尾を第一小隊の第一分隊が承った。

機関銃小隊の川辺分隊（同期で板尾出身）と五〇メートル以上を下がらないことを協定し後退する。北門城外の堆土（墓地）を利用し位置する川辺分隊は、その後方五〇メートルに位置すら本隊が撤退するや、城内の弾薬、兵器庫は大橋兵器軍曹が導火線を引き城外へ脱出、引火を確認、第三中隊以下の援護隊が脱出するや「皆川分隊と川辺分隊猛射撃で援護しながら撤退するぞ！わかったか」と最大の声で叫んだ。

そのころ、大隊本部を中央にどんどん北へ向かって撤退していた。中隊長ほか最後尾が脱出、尖兵中隊の

中央に位置したとき、弾薬庫が大轟音と閃光を煌めかせ、吹き飛んだ直後、敵はどんどんと城内に入ってきたのが微かに見えた。第一分隊「撃て」、ダダダン全火器の一斉射撃だ。「撃ち方止め」五〇メートル撤退。

この間、川辺分隊の重機関銃の重々しい力強い曳光弾をまじえての射撃が開始。中隊本部を中央にして各小隊交互に撤退を始めた。北門の方面よりだんだんと射撃が猛烈になり、チェッコ式軽機関銃が鋭い音をたて、タタタン、ピュン、タタタンピュンと頭上を勢いよく飛んでいく。辺りは暗くなり、敵の行動がわからない。随時撤退後、突如として待ち構えていた敵の全火力の一斉射撃をくらった。雨霰とはこのことだ。至近距離なので頭を上げられない。全員道路、側溝、畑に伏せた。敵はすでに部隊の最も弱い部分を見定めておき、一気に叩き勝負を決め、投降させるか捕虜にし兵器をぶんどるために待ち受けていた。

八路軍の得意中の戦術である。中隊長、小隊長の号令が聞こえるが、何が何だかわからないが、分隊の掌握を思いついて、一人一人の名前を呼んだ。全員無事

だ。疲労困憊、戦闘熾烈を極めたとき、だれもまず指揮官を見るといふ。みんな寄ってきている。嬉しかった。「分隊長の側を離れるな」「絶対死ぬな」と気合を掛け合った。第三中隊二百名の兵、兵器、重機二銃とあまりにも至近距離なので擲弾筒射撃は不能となったが、一斉射撃をしながら退路を遮断されぬよう、少しずつ撤退していた。が、刻一刻と包囲網が狭められた。日本軍が弱いとみて、勢いに乗ると八路軍も強く勇敢だ。どんどん包囲網を狭めてくる、撤退不可能になってきた。そのとき、「軽機故障」。あまりの連続射撃で突っ込みをおこした。最も頼りにしていた重機も一銃二銃と故障した。さあ大変だ。この期に乗じて敵は喚声を上げ威嚇しながら突撃の態勢に入っている様子だ。中隊長は盛んに腰だめ射撃と地平線射撃を命じている。第三中隊の運命は風前の灯火か、弾丸も残り少なくなってきた。突撃白兵戦となった。さすがの敵も下がった。「あまり深追いするな、敵の思う壺にはまるぞ、捕虜になるな」そのとき、軽機故障排除、ダダダン。「重機も直ったぞ、撃つぞ伏せろ」。また一斉に射撃を

くらわした。敵は一瞬怯んだ。そのとき、中隊長は「後方五〇メートル地点に堆土がある、そこまで第一小隊下がれ、各分隊交互に円陣を作り、まず頭の入る穴を、そして体の入る穴を早急に掘れ」の命令である。

そのとき、北方より砲弾の音がする。そして、昼なお明るく曳光弾が飛んできた。本隊が救出に来たな、敵には曳光弾がない、本隊ちょうど百メートル後方、敵が真っ黒に群がる中へ落ちた。そこへ一斉射撃タダダと火を吹いた、敵は一斉に怯んでどんどん後退した。しばらくすると、「オーイ、三中隊迎えに来たぞ！」部隊長だ、各中隊長だ、曳光弾をぶっぱなしてくれた清野小隊長だ（新発田市曾根出身）。「皆川分隊長無事でよかったな！」固く手を握った。

直ちに戦死者の遺体収容、負傷者の応急処置、人員の掌握、弾薬の補給を受け、数名の戦死者を本隊にあずけ、射撃と撤退を繰り返しながら、長い長い夜の後衛尖兵も大きな尊い犠牲を払い、明け方ようやく日照県城に着いたのであった。直ちに全員集合、戦死者を茶毘に付し、しめやかなうちに懇ろに弔い、骨を拾い

合ったのである。戦友は煙となり、日照県の天空高く昇っていった。終戦の声を聞いた直後の犠牲、特に痛恨のきわみである。

第七十六大隊を待っているはずの大小船舶を有する矢部部隊は、既に日照港を出港したばかりであり、日照港と青島の再短距離の道程を断たれてしまった。第七十六大隊は単独自力で膠済線へ、戦闘を交えながら到着したが、蒋介石軍直系の正規軍の命を受け、膠済線鉄道警備の任に当たる。八路军のゲリラ戦法に悩まされながら熾烈の戦闘が続き、第一小隊鉄橋警備分哨についたときは、毎夜の夜襲に悩まされていた。生きて帰れる保証はどこにもなかったのである。

明けて昭和二十一年の二月ごろ、「第七十六大隊は済南に集結せよ」「済南において武装解除を受け復員せよ」とのことであった。済南まで戻り、そして済南から青島まで約三百キロの道程を復員させるとは何たることか。これほど犠牲を出しながら警備をやっているのにと、力んでも敗戦の悲しさ仕方がない。それでもいよいよ故国へ帰れるぞ、と。希望を持って幾日か

かったであろうか、済南に到着。武装解除を受け、若干の被服と食糧をもらい、武器は何もない、「お互いに丸腰だ、お互い助け合いの精神を持って無事に故國の土を全員で踏むことができるように、脱落するな」ヒーヒー、ワンワンと泣き叫ぶ愛馬と愛犬とも別れを惜しみつつ、一路青島へと北上したのであった。

日本軍が引き揚げ、正規軍に渡した地区は至る所破壊され、我々の警備の鉄橋も見事破壊されていた。汽車に乗れる所は乗車したが、客車、貨車によらず車両は中国人、邦人で、軍人は屋根の上であった。中国の汽車はかなり大きいのが、生まれて初めて乗る屋根の上、弱い者は中央、強い者は下、お互いに固く腕を組み、滑り落ちないように戦闘中の恐ろしさとはまた、一味違った恐ろしさで冷や汗が流れた。

長い長い行軍中の敗戦の惨めさ、そして戦争の愚かしさをしみじみとかみしめながら、ようやく青島へ到着した。二、三日後に乗船命令が出された。アメリカのLSTという上陸用舟艇である。舟艇などというところ小さいように聞こえるが、五千トンもあると思われる

大きな汽船であった。一步一步タラップを上り、船内に足が着いたとき、ああ、これでようやく故國に帰れるのだと思った。

夕暮れ時、ドラの音とともに私たちを乗せた復員船は青島港を静かに出航した。だんだんと市街は夕闇に包まれて電気の無いところではとんどの日を過ごした我々には、街の灯は眩しいばかりに光っていた。後方の山は、かつて死闘を尽くし、多くの犠牲者、戦友の眠る山々であろうか、ぼんやりと霞んで見えた。「さらば大陸よ、さらば大陸よ」と心の中で叫んだのはただ私一人であつたらうか。

確か二昼夜くらいの船旅であつたと思うが、突如船中が騒々しくなった。アメリカ兵も動き回っている。聞いて見ると、砲中隊の兵隊が脳溢血で倒れ死亡したとのことで、ここまで生き永らえてきて、そろそろ口本が見えようとするところなのに残念の一言に尽き同情を集めた。そして間もなく水葬とのことで、また一倍気の毒で哀れさを感じた。終戦間際の安東衛の戦闘の犠牲者、終戦直後の後衛尖兵の犠牲者、そして上陸

を明日にして倒れた兵隊にしても、それぞれ紙一重の運命をつくづく感じたところであった。

「故国日本が見えるぞ」だれ言うともなく皆甲板へ上った、かすかにぼうっと霞んで見えた。だんだんと港へ近づき、船は静かに滑るように佐世保港へ入った。日本海軍の大きな軍艦が半分沈んだまま残骸を晒していた。爆撃の跡もあちこちに見えた。賑やかであった甲板上も急に静寂になった。それぞれの思い出いはこの戦鬪のこと、終戦を聞き帰国を前に故郷を偲び散華された戦友のこと、など感慨一入なる一時であった。こうして戦いに敗れて帰ってきた数多くの将兵の心を癒してくれるかのように、国敗れて山河が緑深い美しい自然の姿で御苦勞様と云ってくれているようで、じつと感慨に咽んでいたとき、突如「国敗れて山河あり」と声高らかに朗詠した将校がいた。私も口ずさんだ、唐時代の詩人杜甫の「春望」という詩であった。敗戦後、各地の戦いに敗れ、数々の思い出を胸に佐世保のみならず日本の各地へ復員した数多くの将兵の脳裏に去来したのは、一千二百年前に詠じた杜甫のこの詩で

はなかったのではなからうか。

国敗れて山河あり

城は春にして草木深し

時に感じては

花にも涙をそそぎ

別れを惜しんでは

鳥にも心を驚かす

この詩「春望」を口づさみながら日本の土を幾年ぶりに踏みしめて復員、宿舎へ向かう私の、そして戦友の足どりも軽やかであり、心は早くも越後、それぞれの故郷へ飛んでいた。二十四歳の春であった。

### 【解説】

独立混成第一旅団（島第二九六一部隊）

旅団長・少将 小松崎力雄、参謀・少佐 笠時 乗

独立歩兵第七十二大隊、同第七十三大隊、同第七十

四大隊、同第七十五大隊、独立歩兵第七十六大隊

（大隊長 大佐 堀田房吉）

独立混成第一旅団 砲兵隊、同工兵隊、同通信隊。

独立歩兵第七十六大隊 部隊略歴

昭和十四年九月七日

軍令陸甲第二十六号により、河北省京漢戰邯鄲において谷口混成旅団を改編し、独立混成第一旅団の編制完結と共に其の隷下として独立歩兵第七十六大隊を河北省武安県において編制完結す。

部隊は編制完結後、主として京漢線周辺地区に在りて左の如く治安肅正警備又は作戦に任ず。

自昭和十四年九月〜十八年一月 河北省武安付近の治

安肅正警備（警備地区 武安、邯鄲、鷄澤）

自昭和十八年二月〜十九年四月 河北省曲周付近の治

安肅正討伐警備（警備地区 曲周、鷄澤、永年、肥

後、武安）

自昭和十九年五月〜二十年三月 河北省威県付近の治

安肅正討伐警備（警備地区 威県、南宮、平郷、南

和、廣泉）

右期間内における部隊長・官氏名

故 陸軍少将 笠原政彦

陸軍大佐 工藤豊雄

陸軍大佐 堀田房吉

昭和二十年二月一日

軍令陸甲第十号により、独立歩兵第七十六大隊編成改正完結

大隊長 陸軍大尉 広瀬勸学

昭和二十年四月十八日 編成改正実施しつつ、昭和二十年四月十八日、大隊主力（第四中隊欠）は旅団命令により河北省威県出發、第四十三軍独立歩兵第一旅団長の指揮下に入る。下旬、山東省日照県に進駐す。

昭和二十年八月十四日の間、山東省浜海地区剿滅作戦並びに対米接岸作戦準備のため、山東省日照石嘴子西北方約四キロ四七五高地（本部、第一中隊、重機関銃）、老項（第二中隊主力、重機関銃一分隊）、保安山（第三中隊主力、重機関銃一小隊）の周辺にありて、陣地構築及び教育訓練に従事す。

昭和二十年八月十四日の停戦詔書發布

昭和二十年八月十八日 各々分散兵力を集結困難なる状況下を突破し、日照―諸城―膠県道を沿岸沿い、九月上旬膠県に集結す。膠県出發、途中、来劉店にお

いて旅団主力（独立歩兵第一旅団）に合し、九月下旬龍山に到着、同日出発、十月二日、王村鎮に到着。

昭和二十年十月二日～二十一年一月十二日の間、膠濟線の復旧作業並びに同沿線警備（警備地区 普集含まず臨地含むの間）

昭和二十一年一月十三日 王村出発、同月十六日

濟南集結（白馬山兵舎）、同月二十六日 内地帰還のため濟南出発、二月六日 青島（滄口集中營）に集結乗船待機。

二月十二日 一部兵力（第二中隊）復員のため、青島乗船。二月十六日 佐世保上陸、復員す（兵力一三五名）。

二月十七日 主力復員のため青島乗船。同二十日 佐世保上陸、独立歩兵第七十六大隊の編成を解き復員完結、各列車輸送をもって帰郷す（兵力五〇四名）。第三中隊一三五名を除く。

#### 終戦後の北支状況

大陸令第一千三百八十五号をもって、外地全域は八月十五日零時以後、一切の武力行使停止と定められたが、

支那派遣軍地域に限り特例を認めた。

即ち「支那派遣軍ハ重慶軍及ビ延安軍（中共軍）ノ無秩序ナル行動ニ対シ万止ムヲ得ザルニ於イテハ局地自衛ノ措置ヲ実施スルコトヲ得」とある。

武力停止においては、特にソ蒙軍並びにソ蒙軍に支援された中共軍に対しての武力停止は容易ではなかった。

国共相剋による問題が多発したことにより、北支那方面軍隷下部隊並びに在留法人が多くの苦難を舐めたことは知るところである。終戦を知るや、重慶及び延安の勢力の相剋は急速に激化し、互いに我が占拠地域内の要点や交通線を取先しようとし、あるいは我が軍の小部隊を先に自分の手で武装解除しようとした。

岡村総司令官は「敵より如何な要求あるも統帥系統による命令以外には絶対に応ぜらるのみならず所要に應じ断固自衛力（武力）を行使」するよう命令し、一方中国側に対し、大要次のごとき通告（八月十七日十時）を出した。

「派遣軍ハ大本營ノ敵肅ナル統帥命令ニ基ツキ既に

現配置ヲ以テ停戦態勢ニ移セリ。然ルニ中国軍隊局地指揮官ノ命令ナルト称シ……地区等ニ於イテ日本軍ニ対シ不法攻撃態勢ヲ示シ或イハ武装解除ヲ求ルモノアルハ我が派遣軍ノ甚ダ遺憾トスルトコロナリ。

……派遣軍ハ嚴肅ナル軍紀ノ下ニ本職ノ命令ニ基キ挙措進退ヲ律シ今後停戦協定ノ成立ニ基ツキ逐次所要ノ実行ニ移転スベク他ノ容喙ハ断ジテ許サズ。右、中国軍隊ノ不穩行動ハ固ヨリ蔣委員長ノ命令ニアラザルベシト確信スルヲ以テ蔣委員長ハ速ヤカニ中国軍全部ニ対シ末梢部隊ニ至ルマデ即時現態勢ヲ以テスル停戦実行ヲ徹底セシメラレンコトヲ要請ス。

自今右不穩行動ヲ継続スルモノニ対シテハ蔣介石委員長ノ命令ニ服シアラザルカ或イハ其ノ意図外ニ出アルモノトミナシ派遣軍ハ已ムヲ得ズ断固タル自衛行動ニ出ズルコトアルベシ。右通告ス」

この通告は敗戦国が戦勝国に対し、その停戦措置に対し憶することなく正論をもって要求したものである。

九月九日、岡村司令官は何王欽將軍に投降し、直ちに各方面軍、軍はこれに基づく命令を下すと共に訓示

を与えた。

しかし、治安不良であったのは山東地区である。

独立歩兵第七十六大隊主力は、該地区の独立歩兵第一旅団の指揮下にあつたため、体験記本文中にもその状況を散見する。

山東地区には、第四十三軍司令部、第四十七師団、独立歩兵第一旅団、独立混成第五旅団、第九、第十一、第十二独立警備隊、その他、約七〇、五〇〇名（内患者三三三〇名）、居留民は約七七、五二〇名であり、その内約一〇、二〇〇名は新郷、鄭州地区からの移動者であつたという。

また、独立混成第一旅団（島兵団）は平津保（北平、北京、天津）地区であり、北支那方面軍司令部以下約一二六、八〇〇名（内患者一二、七〇〇名）であり、居留民は約二〇七、一三〇名内外であつたという。

このように、北支那方面軍隷下地区は多数の居留邦人を保護し、内乱的要素を含んだ国共相剋の戦乱を排しつつ、多くの犠牲を払い、戦後にも長く尾を引く問題をもちながらの復員状況であつた。